



ウシの飼育について話す松山先生（左）と吉村技師（中央）と山崎技師（右）

## ユーザー紹介

### 名古屋大学農学部 松山秀一 准教授

松山先生は現在、ウシの低受胎改善技術や生殖メカニズムの解明に取り組んでいます。低受胎や分娩間隔の延長は、畜産農家の収益に直結する重要な課題であり、畜産業界全体で注目されている問題です。先生によれば、低受胎に関連する子宮環境や胚の生存性といった仕組みを解明するためには、標準的な状態のウシを安定的に確保することが不可欠であるとのこと



## ユーザーコメント

私たちの研究では、正常な状態のウシ個体に対して行われた処置や投薬がその個体にもたらす変化のデータを取得しています。これには、まず病気や栄養不足ではない、健康で正常な発育をしている「スタンダードな状態」の動物がいるベース環境が維持されていることが必要不可欠です。

大学の農場では多くの場合、ごく限られた人員で動物の飼育管理が行なわれており、東郷フィールドにおいては、ウシ約35頭・シバヤギ約90頭の飼育管理を担っているのは吉村 文孝 技師・山崎 絹世 技師の2名です。

「スタンダードなものを年中無休で安定供給する」というのは容易なことではなく、動物であれば体調不良になる個体もあれば、母ウシに世話をされない個体など個体ごとに様々なイレギュラーが発生します。そういった変則的な物事に対応しつつ研究のためのベース環境を整えて、

実験にも協力してくださる技術職員には、大変感謝しています。



日本の在来種“シバヤギ”はウシのモデル動物

仔ウシの立ち上がり  
が遅い気がします…

夕方頃まで様子  
を見てみましょう



取材前夜に出産したウシの親子の様子を注意深く観察しています



このサイレージ  
(餌)は好きな  
みたいですね

ウシも好きなエサには食い付きがよい



母ウシが世話をしなかったため技術職員が代わりに世話をした仔ウシはすっかり人馴れし近づくとき寄って来てしまいます